

【実践報告4】

高等学校における非行の予防教育

－ 三つのグループ・アプローチの実践を通して －

1 学年集団の状況（高等学校1年生 男子237人 女子42人）

本校は西三河にある工業科の伝統校である。近年は就職に有利なため本校への志望者が増え、在校生の雰囲気も大変落ち着いている。だが、1年生には、多くの高校と同じく、高校生活に慣れ始めた安堵感と入学後の目標の喪失といったことから、気がゆるみがちで非行が懸念される生徒もみられる。そこで、1年生全体に対して非行の予防教育として、グループ・アプローチを試みた。

2 実践

(1) 活動① 「何が非行なのか？」(P.100～102 参照)

ア ねらい

どのような行為が非行となり、処分の対象となるのかを各自が考え、さらにグループで意見交換することによって、非行に関する知識を身に付ける。また、活動を通じて、「道徳的に悪いこと」と「法的に悪いこと」が必ずしも一致しないことや、善悪の基準が人によって違うことなどを理解するとともに、他の人と意見を交わすことで自己理解・他者理解を深め、感受性の促進を行う。

イ 活動の内容

- ① 「非行」の定義を説明し、非行を犯してしまった場合には、どのように処遇されるかを説明する。
- ② 与えられた項目の行動を、最初に個人で「悪くないこと」「悪いこと」「悪いことの中でも非行(犯罪)になること」の三つに分類する。
- ③ 次にグループで話し合い、グループでの分類を決定し、発表する。
- ④ 各グループの発表した内容を比較しながら、まとめを行う。
- ⑤ 各自で「振り返り用紙」を記入した後、グループで今日の活動の感想を述べ合う。

ウ 参加者の様子

1学期の期末考査後、夏休み直前の現代社会の授業を利用して、2クラスで実施した。うち一方のクラスは全員男子のクラス、もう一つは女子36人男子3人という女子主体のクラスであった。クラスとしての明るさや反応の大きさなどで多少差はあったが、活動自体については、どちらのクラスも同じような様子が見られた。「非行」という題材自体が普段扱わないことであったため、導入での非行の定義や処遇の説明のときからある程度関心を示す様子が見られた。さらに、その後グループでの話し合いを始めていくと、「非行」のことは“常識”として知っているようで意外と知らないことであったり、グループで話し合う中で、「悪いことの中でも非行になること」はだいたい決定できるのだが、「悪くないこと」「悪いこと」については人によって意見が分かれたりして、盛り上がっているグループではかなり活発に意見が交わされていた。しかし、一部には、話し合うのを嫌い、最初から多数決で「悪くないこと」「悪いこと」を決めるグループがあったり、やる気のない姿勢をとる者がいたために他の者が遠慮してしまい、話し合いたい素振りを見せつつもほとんど議論の進まないグループもあったりした。しかし、全体としては前向きに取り組んで楽しむ者が多く、話し合いや発表を含めたグループ活動はかなり盛り上がっていたといえる。

「振り返り」のアンケートにおける主な質問の結果と、生徒の活動を通じて感じたことを以下に示す。

今日の授業を通して、非行についての知識を得ることができましたか。	1 (得ることができなかった)	2	3	4 (得ることができた)
	0.0%	2.6%	58.4%	39.0%
グループの話し合いでは意見を出すことができましたか。	1 (意見を出せなかった)	2	3	4 (意見を出せた)
	3.9%	28.6%	42.8%	24.7%
グループの話し合いでは他人の意見を聞くことができましたか。	1 (聞けなかった)	2	3	4 (聞けた)
	2.6%	10.4%	45.4%	41.6%
グループの活動に参加することができましたか。	1 (参加できなかった)	2	3	4 (参加できた)
	0.0%	13.0%	39.0%	48.0%
グループの活動では、あなたがたのグループはまとまっていたか。	1 (まとまっていなかった)	2	3	4 (まとまっていた)
	3.9%	19.5%	35.1%	41.5%
この授業はあなたのためになりましたか。	1 (ためにならなかった)	2	3	4 (ためになった)
	0.0%	3.9%	42.9%	53.2%
この授業は楽しかったですか。	1 (楽しくなかった)	2	3	4 (楽しかった)
	1.3%	13.0%	44.1%	41.6%

◎この授業の感想を書いてください。

- ・悪い、悪くないは場面によって変わると思った。自分で悪くないことだと思っていたことが、他の人からは悪いことだと言われたのでびっくりした。気を付けるようにしたい。
- ・自分の思っている「悪くないこと」「悪いこと」「非行」と、みんなの思っていたことが違って、みんなのいろいろな意見が聞けて、みんなの考えを聞いていると「そういう考えもあるんだな」と納得できるものがあり、楽しかった。
- ・あまり自分に関係のないような感じがしていたけど、実はそうではなく、とても身近にあることなんだと実感した。
- ・今日の授業で非行の知識が身に付きました。もっとこういう知識を身に付けたいです。

この「振り返り」のアンケートの結果を見ても、各設問の肯定的回答率が極めて高率であることから、この活動の「ねらい」とした「知識を身に付けること」「自己理解・他者理解を深めること」などもおおむね達成できたと考えてよい。また、実際の活動中の様子や、「振り返り」における感想などからも、「今まで知らなかったことを知った」という新しい知識を得た実感や、「今まで考えもしなかった『非行』のことを考える機会になった」という実感がはっきりと伝わってきた。さらに、参加した生徒の中で改めて「非行に陥らないようにしましょう」という意志が固くなったこともうかがえた。個々の生徒の善悪の判断や非行への認識を深めることができた活動であったといえる。

エ 課題

活動の展開の仕方について二点課題を挙げることができる。まず一つは、やはり時間配分のことである。実施した授業時間が通常より5分短い1時限45分の短縮授業の時であったこともあるが、この活動自体、「導入」に位置付けられる非行の定義や処遇の説明といった知識の教授に時間がかかり、その後のグループでの話し合いや発表、そして「振り返り」の時間が十分に確保できない傾向があった。内容が盛りだくさんであるので、生徒には「学んだ」気持ちになれるであろうが、せわしなさは否めない。もう少し内容を精選して展開をスムーズにしなければならないだろう。

もう一つは、グループの編成の問題である。アンケートの結果を見ると、グループに関する設問ではやや否定的な回答が多くなっている。これは、もともと高校生がグループでの活動に不慣れなこと

もあるが、時間のない状況の中でグループを単純に席の近い者同士で作らせたため、必ずしも親しくない者同士が突然に話し合いを求められたことから、グループがまとまりきれなかったためと考えられる。こうした活動をスムーズに展開するためには、4月当初より人間関係づくりの活動を計画的に実施するなどして、クラス内のコミュニケーション能力を高めておく必要があるであろう。

(2) 活動² 「損得勘定をしてみよう」(P. 103~105 参照)

ア ねらい

「非行をする」という行動の損得を考えることで、その行動の結果としてもたらされるリスクを回避する判断力を養うとともに、意見交換を通して他者理解を促しつつ、互いによい行動を選択できるようにする。また、非行をすることによって得をすることが一時的であるのに対し、損することが継続的であることや、トータルでみて損のほうがずっと多いことを知る。

イ 活動の内容

- ① 非行した場面をあげ、「得したこと」と「損したこと」を思いつくだけ挙げてみる。
- ② グループで話し合い、まとめ、発表する。
- ③ 各グループの発表した内容を検討しながら、まとめを行う。
- ④ 各自で「振り返り用紙」を記入した後、グループで今日の活動の感想を述べ合う。

ウ 参加者の様子

夏休み明けの9月の最初の現代社会の授業を利用して、1年生7クラスすべてで実施した。クラスの雰囲気によって、多少の差はみられたが、おおむね同様な反応・結果がみられた。活動を始める際、最初に「非行をしたときの損得を考えてみよう」と切り出すと、生徒の側には「非行は悪いこと」という意識が根付いているためか、ほとんどが「(非行の) 損得なんて考えたことない」「得することなんかあるのか」という反応であった。そこで、「考えたことがないからこそ、この機会に冷静に非行の損得を考えてみよう」と話し、活動に取り組みさせた。

実際の活動では、どこのクラスにおいても、グループでの話し合いの時にはほとんどのグループで活発に意見を出し合っていた。概して、「得をしたこと」はあまり思いつかない様子で、せいぜい「お礼(盗んだ物の一部)をもらった」「ただで物(盗品)をもらえた」「B君との友情が壊れずにすんだ」「B君から信頼されていることが分かった」など2~3の意見しか挙がっていなかった。それに対して、「損したこと」は、「バレた時に言い逃れができない」というような現実的なリスク以上に、「共犯者になった」「非行に加担した」「バレた時の世間体が悪い」「親に顔向けができない」「後ろ指を指され続ける」「うしろめたい気持ちが一生続く」「罪悪感が残る」など、罪悪感にとまなう心理的なリスクを挙げるが多かった。また、「一度手伝ったから次も当てにされる」「また自分が使われる」「パシリにされる」など、友人関係に関する「負い目」も挙げられていた。どこのクラスでも、グループ発表の時に新しい損(デメリット)が挙げられるたびに、笑い声も交りながらも納得する声が聞こえていた。こうしたことから、教員によるまとめの中での「損は継続的」という話が生徒にはかなり納得できた様子であった。また、まとめの時に配布した「A君・B君のその後(例)」に対しては、改めて非行のリスクの大きさに恐れを感じた様子であった。

「振り返り」のアンケートにおける主な質問の結果と、生徒の活動を通じて感じたことを以下に示す。

今日の授業を通して、非行における「損得」を 考えることができましたか。	1 (できなかった)	2	3	4 (できた)
	0.0%	4.2%	35.4%	60.4%
今日の授業を通して、非行の損(デメリット) を学べましたか。	1 (学べなかった)	2	3	4 (学べた)
	0.0%	1.3%	22.4%	76.3%
グループの活動に参加することができた か。	1 (参加できなかった)	2	3	4 (参加できた)
	0.4%	12.7%	42.6%	44.3%
この授業はあなたのためになりましたか。	1 (ためになかった)	2	3	4 (ためになった)
	0.0%	3.0%	37.1%	59.9%
この授業は楽しかったですか。	1 (楽しくなかった)	2	3	4 (楽しかった)
	0.0%	15.2%	55.3%	29.5%

◎ この授業の感想を書いてください。

- ・非行に得はないと思った。
- ・分かっていたことだけど、改めて非行はダメだと思った。自分も同じようなことにならないようにしたい。断る勇氣は必要だなと思った。
- ・万引きなどの非行は、手伝いだけでも絶対しないでおこうと改めて思った。友達に誘われても断れる勇氣をもとうと思った。
- ・万引きを頼まれても、断る。これが本当の友達だと思いました。
- ・今回は非行について考えるいい機会になりました。この中ではA君はB君に「友達だろ！」と言われ見張りをしてしまったので、自分は「友達だからダメだよ」と言えるようになりたいと思いました。
- ・友達の誘惑はとても断りにくいし、嫌われたらどうしようという考えがはたらいってしまうけれど、それでは自分のためにも友達のためにもならないので、“No”と言える勇氣が必要だと思った。

この「振り返り」のアンケートの結果をみても、どの設問でも肯定的回答率が極めて高いことから、この活動が大変支持されたことが分かる。生徒が非行について「考え」「学び」、そして自らの「ためになった」という実感をもてる活動だったといえる。このことは、この活動の「ねらい」である「行動の結果としてもたらされるリスクを回避する判断力を養う」ことの、「判断力」の前提となる非行のリスクについての「知識」を身に付けることができたということであり、そのことはおのずと回避行動をとろうという感情ができたということでもある。「非行は悪いこと」とは知っていても、これまで漠然としか考えることのなかった「非行」のリスクの問題を、ここで友達と話し合いながら冷静に考えたことで、改めて「非行はしない」という思いを強くしたのである。その意味で、個々の生徒の中で非行に対する思索が深まったといえる。こうしたことから、「振り返り」の感想では、「非行はしない」「誘われても断る」という意志を表明する内容がほとんどであった。さらに、その中でも「友達に誘われたら本当に断れるだろうか」という友達関係の現実味から「断る勇氣」が必要という思いを抱く者もいた。このことは、この次の活動である「断る勇氣」につながるレディネスができたことを意味し、スムーズに次の活動に取り組み、効果が一層高まることが期待された。

エ 課題

この活動は1年生全7クラスで行ったが、これ以前に「何が非行なのか？」のグループ・アプローチを行っていたクラスと、そうでないクラスとでは、活動の導入の仕方を変えざるを得なかった。「何が非行なのか？」を行っていたクラスは、この活動に入るに当たっても唐突な印象はない様子で、す

で「非行」についての知識があるため、スムーズに活動を展開することができた。一方、「何が非行なのか？」を行っていなかったクラスは、「非行」を扱うこと自体が唐突な感じもあったうえに、導入部分で「非行」の定義的な知識やイメージを膨らませる話をする必要があった。両者は、展開や「振り返り」に見られる結果にはそれほど差はないようにも思われたが、「何が非行なのか？」を行ったことがあったかどうかによって、個々の生徒の「非行」に関する認識の深まりに差ができたのは明らかであろう。この活動の効果を一層高めるためにも、できるだけこの活動の前に「何が非行なのか？」は実施しておきたいものである。

(3) 活動③ 「断る勇氣」(P.106~108 参照)

ア ねらい

非行に誘われた場面を想定し、断り方を検討し練習することで自己主張的な行動(断り方)を習得する。また、悪い誘いであれば、相手の気持ちを考えることは必ずしも必要ではなく、相手につけこまれないようにきっぱりと断ることの重要性を知る。

イ 活動の内容

- ① 「万引きの見張りを頼まれる場面」での答え方七つを、よい(自己主張的)答え方と悪い(自己主張的ではない)答え方とに分類してみる。
- ② グループで話し合い、七つの答え方の中で最もよいと思われる答え方を決定し、理由も考え、発表する。
- ③ 各グループの発表した内容を検討しながら、まとめを行う。
- ④ 「きっぱり断る言葉」を考え、グループで伝え合う。
- ⑤ 各自で「振り返り用紙」を記入した後、グループで今日の活動の感想を述べ合う。

ウ 参加者の様子

上記の「損得勘定をしてみよう」を行った次の現代社会の授業で、授業時間に比較的余裕のあった5クラスで実施した。今回は、どこのクラスもすでに「非行」についてのグループ・アプローチである「損得勘定をしてみよう」を経験しているので、再び(クラスによっては三度)「非行」を扱うことに対しても突飛な感じはなく、スムーズに内容に入っていた様子であった。

今回は活動を始めるに当たって、前回の「損得勘定をしてみよう」の「振り返り」の感想をいくつか紹介した。そして、「非行をしない」「誘われても断る」という決意表明だけでなく、「断る勇氣」の必要性に多くの人気が付いたようだと言われ、その上で、実際に「断り方」を考えておかないと意に反した「失敗」に陥ってしまう可能性があることをあげ、「断り方」を考えてみることの必要性を説いてから実際の活動を行った。

実際の活動では、七つの答え方のうち、A・B・Cの三つは万引きを手伝っているのだから「悪い答え方」となるのは当たり前で、どこのグループでも全く論外といった感じであった。話し合いは、万引きを断っているD・E・F・Gの内容の検討という形で進められていた。すでに「非行」についてのグループ・アプローチを経験し、内容的にも前回との関連が深いためか、今回はどのクラスでもほとんどのグループが積極的で、活発に意見をかわしながら、自分たちなりの論理で「最もよい答え方」と思われるものを選んでいった。その結果は、大半がE又はFを選んでいった。その理由としては、Eはきちんと断りながらも代替案を示して自分だけでなく友達も救おうとしているということ、Fは断るのに非行のリスクを挙げて友達を思いとどまらせようとしているということが中心であった。また、5クラス中の一部ではあったが、DやGを支持する意見もあった。Dは「万引きはやらん！」という

断固とした意志が態度として出ているし、友達も「まずい」と思ってやめようと思うだろうし、一人じゃできなくなるからということであった。Gは「親に迷惑をかけちゃいかん。悲しませたらいかん」からで、「友達も『親』を出されたらひるむはず、というか“我に返る”はずだ」ということであった。このように、どこのクラスでも「答え方」の内容について活発に議論が進んだので、まとめるときには、非行に誘われたときの答え方には、まずは「はっきりと断る」自己主張的な答え方が必要であるという話とともに、できたら友達にも非行をさせないような「救える」答え方がいいのだろうという話をする事となった。図らずも「よりよい友達関係」ということに言及する展開となった。

「振り返り」のアンケートにおける主な質問の結果と、生徒の活動を通じて感じたことを以下に示す。

今日の授業を通して、「断る勇気」の必要性を学べましたか。	1 (できなかった)	2	3	4 (できた)
	0.5%	1.6%	32.6%	65.3%
今日の授業を通して、非行に誘われたときの断り方(自己主張的な対応)を学べましたか。	1 (学べなかった)	2	3	4 (学べた)
	0.0%	2.1%	41.7%	56.2%
グループの活動に参加することができましたか。	1 (参加できなかった)	2	3	4 (参加できた)
	2.7%	14.4%	36.4%	46.5%
この授業はあなたのためになりましたか。	1 (ためにならなかった)	2	3	4 (ためになった)
	0.0%	2.7%	32.1%	65.2%
この授業は楽しかったですか。	1 (楽しくなかった)	2	3	4 (楽しかった)
	0.5%	14.4%	42.8%	42.3%

◎ この授業の感想を書いてください。

- ・ 非行の勧誘を断るには、はっきりと断ることが大切だということが分かりました。自分がやめるだけでなく、相手もやめさせることが本当の友達だと思う。
- ・ 自分が非行にまきこまれないだけでなく、相手もやらないようにしないといけないと思った。
- ・ 自分もいつかこんな立場になるときがきつとあると思います。けど、そこで今回の授業みたいに断る勇気が大事になってきます。その勇気が今回の授業で学べたので、これからは気を付けます。
- ・ 意外にこういう主張をやんわりとするのは難しいものなんだなと思いました。でも、いろんな断り方があるなあと思いました。
- ・ 断る勇気は思った以上に勇気がいります。その場にならないと分からないこともあるけど、自分の心の中に断る言葉を決めたので、少し安心しました。
- ・ 友達だったら絶対にやめさせてあげるのが一番いいと思うから、友達関係とかも大切だけど、どんな手を使ってでもやめさせてあげるべきだと思いました。

この「振り返り」のアンケートの結果をみても、どの設問でも肯定的回答率が高いことから、この活動もまた支持されたことが分かる。この活動もまた、生徒が非行について「考え」「学び」、そして自らの「ためになった」という実感をもてるものだったといえる。この活動では、「ねらい」とおり、非行の勧誘に対する断り方を検討していく中で、自己主張的な行動(断り方)の必要性に自ら気付くとともに、具体的にその方法も学ぶことができた。さらに、この活動は生徒にとって友達との関係を考えるよい機会になったようである。むしろ、生徒の側ではこちらの方に重きをおく心情があったかもしれない。「振り返り」の感想の大半には、「非行はしない」「誘われてもはっきり断る」こととともに、「友達もやめさせるようにしたい」ということが書かれていた。このことから、この活動は、参加

した生徒自身が非行に対する意識を高めて自己主張的行動がとれるようになっただけでなく、その効果から生徒が接している周囲の友達も救われる可能性が高まったといえるだろう。その意味で、大変意義のある活動であった。

エ 課題

この「断る勇氣」という活動は、もともとは七つの答え方をグループで話し合っ「よい答え方」と「悪い答え方」とに分類するとともに、ロールプレイを行う中で、自己主張的な断り方を学び習得していくものであった。しかし、実際の活動では、答え方を単に分類するだけでは簡単すぎてグループで話し合おうという雰囲気さえならなかった。そこで、^{きゆうきよ}急遽やり方を変えて「最もよい答え方とその理由」を話し合うこととした。また、ロールプレイについては、十分な時間をかけられなかったこともあるが、何より男子高校生の心性としてロールプレイに対する抵抗感が強く、最初の1クラスで試みたが、誰もやろうとはせず完全に失敗してしまった(女子主体のクラスは盛り上がった)。そこで、これもアレンジしてロールプレイはやめ、グループ内で各自で考えた「きっぱり断る言葉」を発表し合うこととした。このように実施段階になってアレンジを加えたため、そのよしあしを十分検討しきれていない。時間配分も含めて、より効果的な内容になるように考えていきたい。

3 効果・課題

(1) 効果

この非行予防を目指した三つのグループ・アプローチは、初めに「何が非行なのか？」で非行についての知識を身に付け、次に「損得勘定をしてみよう」で非行のリスクを理解する。最後に「断る勇氣」により自己主張的な行動(断り方)を学ぶことで非行に陥らない態度を身に付けるというように、「知識の習得」→「思索を深める」→「シミュレーション」といった配列で展開することがより効果的である。この配列とおりに実施した2クラスでは、生徒の非行に対する認識をかなり深めることができた。この三つの活動を通して、十分に非行についての知識と、そのリスクを回避するスキルを学ぶことができたと思われる。夏休み前に時間がとれず、「損得勘定をしてみよう」と「断る勇氣」の二つを実施した3クラスでは、非行についての知識の部分でやや不足な感じはあるものの、この一連の非行予防の活動で一番大切な非行について考え、非行をしないことを決意し、そのリスクを回避するスキルを学ぶことは十分できたはずである。実践時間がなかなかとれず、「損得勘定をしてみよう」一つだけの実施となった2クラスも、普段考えることのない「非行」という問題を扱い、非行について考え、非行をしないことを決意したり、そのリスクを回避するスキルの必要性を感じたりしたはずである。程度の差こそあれ、これらの活動を実施した本校の1年生全体に、非行は身近なものであり、その場でしっかりとした対応をすることによって自己の人生に責任をもつことができることを実感させることができた。三つの活動後のアンケートで「この授業は自分のためになった」と回答する者が、それぞれ96%を超えたことから、生徒が「よい学びをした」という実感をもつことができた活動だったといえる。その意味では、これらの活動の目的はほぼ達成できたと思われる。この活動の成果が生徒の実際の日常生活の中に生かされることを期待したい。

(2) 課題

三つの活動の「振り返り」のアンケートの中で、「グループの活動に参加することができたか」の設問だけは、常に肯定的回答がやや少ない。高校生はグループ・アプローチに抵抗感を抱く年代であることもあり、必ずしもグループでの話し合いに積極的でない者が一部にはいることも分かる。しかし、肯定的回答が少ないからといって、グループ・アプローチを実施することに消極的になってはいけ

ない。コミュニケーション能力を育成するためにもこうした取組をする意味がある。他人とコミュニケーションをとることを面倒に感じたり、人間関係に苦手意識をもっていたりする生徒は少なくないだろう。だからこそ、話し合う経験を通して、「話すこと・聞くこと」の力を身に付けていくことは極めて重要である。ほとんどの生徒が高校卒業後直ちに就職をする本校においては、このような実社会で必要とされるコミュニケーション能力を、在学中に身に付けておく必要がある。高校入学当初よりグループ・アプローチを計画的かつ継続的に実施し、グループで話し合うことに慣れさせていくとともに、個々の生徒の「話すこと・聞くこと」を中心としたコミュニケーション能力を高め、人間関係形成能力を身に付けていくことが必要なのである。

今回は1年生の全クラスを対象として行ったが、時間の制約上、全クラスですべての活動を行うことはできなかった。そのため、クラスによって効果に差が出たことは否めない。また、実施時期も非行に陥りやすい夏休みの前に実施することが非行予防の効果を高めると考えるが、これも時間がとれず二つは夏休み明けの実施となった。この活動は、生徒にとって学びの実感が強い。配列や実施時期などを含めて検討し、より効果が得られるように学校全体で取り組むことが望ましい。

<参考文献>

國分康孝監修 押切久遠著 『非行予防エクササイズ』(図書文化社 2001)